

土佐国分寺の研究

一古図の作成年代と境内・建物変遷について

Keywords

国分寺 古絵図 廃仏毀釈
坊(塔頭) 仁王門 大師堂

1. 研究背景と目的

土佐国分寺は天平13年(741)聖武天皇の勅願により諸国に建立された寺院で、寺名を金光明四天王護国寺と呼んだ。現在は摩尼山国分寺宝蔵院と言ひ、四国霊場第29番札所に指定されている。創建当時の伽藍は壮大であったと考えられ、寺域や境内配置の特定を明らかにするため、何度も発掘調査が行われてきたが、未だに不明な部分は多く残されている。

一方、昭和53年(1978)に行われた庫裡改修の際、5枚(図1を除く)の古絵図が発見された。これらは『特別展]土佐国分寺 四国八十八ヶ所霊場①』に掲載されており、江戸末期から明治にかけてのものと考えられていて、変遷をみる上では貴重なものであるが、時代の特定には至っていない。

そこで、本研究ではこれら古図の解読を行い、作成年代ならびに境内配置及び建物の変遷課程を明らかにすることを目的とする。

2. 研究方法

- (1)古絵図の解読を行う。
- (2)古写真の収集・分析を行う。
- (3)古文書及び文献調査をして、建立・再建・修復・廃絶等の歴史を明らかにする。
- (4)現状の国分寺の実測調査を行う。
- (5)上記を基に、古図の時代特定を行い、伽藍配置及び建物がどのような変遷課程を経て現在に至っているのか考察する。

3. 調査

第一回：2011年10月7日 国分寺
【対象】本堂・大師堂・開山堂
第二回：2011年11月8日・10日・11日 文献調査
2011年11月9日 国分寺
【対象】伽藍全域

4. 国分寺について

4.1 国分寺の概要

土佐国分寺は行基菩薩が開基し、弘仁年間に弘法大師が中興したことから四国霊場に指定される。天文19年(1550)頃兵火に遭った後、永禄元年(1558)に長宗我部が観音堂(本堂)を建立し、再興が行われる。長宗我部氏の

滅亡後、慶長5年(1600)山内一豊が初代土佐藩主として入国し、二代藩主忠義公の時代に諸堂の復興が進められた。この頃、国分寺には坊(塔頭)が六坊存在しており、境内周辺に配されていた。また、末寺として在天寺・長久寺・釈尊寺の三ヶ寺を擁していた。

現在、境内には仁王門・本堂・大師堂(弘法大師を祀る)・開山堂(行基菩薩を祀る)・鐘楼・中門・書院・庫裡等が存在する。総社は国分寺境内の西側に接して社地を構える。

4.2 国分寺の歴史

国分寺の年表を以下に示す(表1)。

表1. 国分寺の歴史

年代	事柄
天平13年(741)	創建
弘仁年間	第29番霊場指定
天文19年(1550)頃	兵火
永禄元年(1558年)	本堂再建
寛永11年(1634年)	本堂修復・向拝取り付け 大師堂創建 鐘楼修復(創建不明)
慶安3年(1650)	開殿(客殿)建立
承応2年(1653)	本堂修復
承応4年(1655)	仁王門再建→鐘楼を廃して「楼門」建立。鐘楼を楼上へ
寛文10年(1670)	十王堂・仁王門東側へ
寛文11年(1671)	天皇社改築 崇道天皇社→聖武天皇
明和元年(1763)	総社建立
明和6年(1769)	総社・柱に墨書
明和7年(1770)	総社鳥居建立
天明6年(1786)	仁王門改修
文化元年(1804)	大師堂修復・三間造・向拝取り付け・基壇改築
天保8年(1837)	仁王門再興
嘉永2年(1849)	開山堂改築(創建不明)：三間半四面→三間四面へ
慶應2年(1867)	仁王門改修
明治17年(1884)	石塔造立(大師堂前)
明治37年(1904)	大師堂修復：入母屋造・千鳥破風・向拝・軒唐破風・茅葺 本堂：特別保護建造物に指定 十王堂廃絶
明治41年(1908)	庫裡(書院・北側)改築
昭和3年(1928)	仁王門改修
昭和7年(1932)	本堂解体修理
昭和25年(1950)	本堂：重要文化財に指定
昭和35年(1960)	大師堂修理：千鳥破風取り除き・茅葺→銅版葺へ
昭和52年(1977)	鐘楼建立 書院改築 庫裡増築
昭和53年(1978)	客殿建立(開殿の場所)
昭和58年(1983)	書庫改築
昭和60年(1985)	仁王門解体修理
昭和62年(1987)	東庫裡新築
平成2年(1990)	便所改築
平成4年(1992)	北庫裡新築
平成6年(1994)	本堂屋根葺替
平成9年(1997)	中門改築
平成14年(2002)	東庫裡新築

ここで、総社は寛文9年(1669)に国分寺境内に移築されたとの伝えがあるが、『四国偏礼霊場記(1689年刊行)』



K08017 上野 桃子

及び『四国遍礼名所図会(1801年復刻刊行)』を基に分析したところ正確性に欠けるため、本論では棟札があつて正確な「明和元年(1763)」に移されたものとした。

5. 古絵図の時代について

現在、国分寺には6枚の古絵図が所蔵されており、時代特定を行う5枚を除いてもう1枚存在(図1)する。その図は古くから江戸末期の境内図として国分寺研究に使用されてきた。この図を参考資料として作成年代特定を行った。

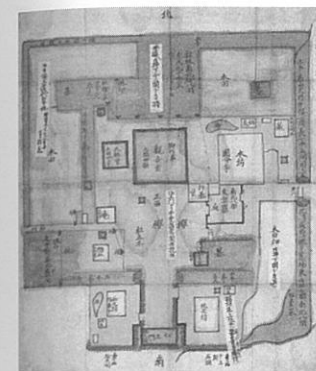


図1. 国分寺境内図

図1が『調査概報』で江戸末期(1830~1867)のもと考えられている境内図である。図の右にこの図から読み取れる主な建物を示した。この当時境内には西之坊と北之坊が存在していた。

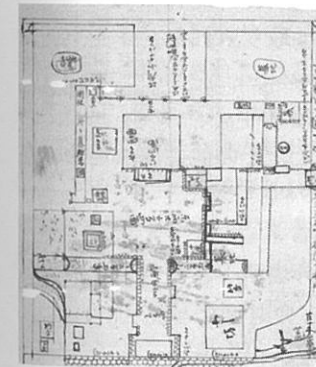


図2. 国分寺境内図

図2は後の加筆が多数見られる境内図である。図1と比較したところ、境内に配置されている建物に変わりがなかった。同様に図3も変化は見られなかった。

しかし、仁王門西側の領地の部分で図1と図2・図3には違いが見られた。図2では領地であった部分に後から書き込みがされ、境内が削減された様子が示されている。図3ではそのように描かれ、さらに削減されたことが図1で示されていることから、図3は図2の後に清書として描かれ、さらに削減された後に描かれたものが図1であると考えられる。

よって、図2は図1と図3以前に描かれたもので、図1と図3の古図が描かれる時に加筆され、少なくとも2度書き込みがされたものと思われる。

一建物一

御作事観音堂・大師堂・行基堂・天皇社・六地藏堂・庵・山王権現・総社・仁王門・十王堂・弁財天・護摩堂・本坊・作事中西之坊(仁王門西側)・北之坊(同東側)



図4-1. 国分寺図

図4-1は坊の移り変わる様子が書かれた文書が添えられている境内図である。図4-2に解読した文書を示す。

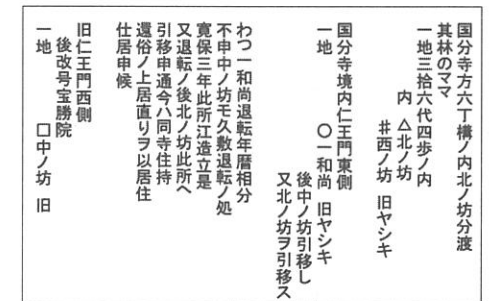


図4-2. 文書の解読文

図4-2によると、仁王門東側の中之坊は「寛保三年此所江造立」とあり建立された時期が分かった。その移り変わりは仁王門東側は「一和尚ヤシキ→中之坊(寛保3年(1743))→北之坊」で、西側は「中之坊→西之坊」である。また、図4-1から北之坊と西之坊は仁王門両側に配される以前は大師堂の西側に位置していたことが分かった。

この図が書かれたのは北之坊住持が「山本喜多助」の時で、そこに居住していることが書かれている。この住持がいつの時代の人であったかは明らかにすることはできなかった。

しかし、仁王門東側の部分が図1よりさらに削減されていることから、図1以後に描かれたものであると考えられる。

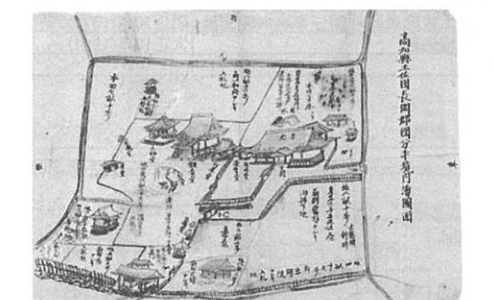


図5. 高知懸土佐國長岡郡国分寺境内

図5は『報告概報』に「国分寺に所蔵されている文書に関連するものがあり、明治10年(1877)6月23日付で区務長宛に提出した寺領払下げ願い出に添付された古絵図」とあるため、これはこの時のものとした。赤色で書

かれたものは払下げ後に書かれたものと考えられ、払い下げはうまくいったものと思われる。

仁王門東側の北之坊があったところには「前北之坊ヤシキ」とあり、この時すでに坊は廃していたことが分かる。

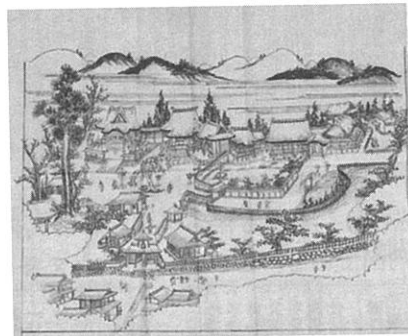


図6. 国分寺図

図6は、図5では境内に向かって東面して建っていた総社が南面して建っていることから、現在位置している場所に移築されたものと思われる。また、大師堂の屋根が「宝形造(図5)→入母屋造・千鳥破風付(図6)」に変わっており、大師堂は明治17年(1884)に改築されたと伝えあることから、この絵図はそれ以後に描かれたものと考えられる。

さらに、十王堂(明治37年(1904)廃絶)が仁王門東側に存在することからこの図は明治17年～明治37年に描かれたものであると言える。

6. 境内変遷について

時代特定を行った絵図及び『四国遍礼霊場記(1689年刊行)』、『四国遍礼名所図会(1801年刊行)』、大正期の実測図を基に長宗我部再興以降から現在にかけて境内変遷がどのようなものであったか明らかにした。使用した図面と年代は表2に示す通りである。

表2. 使用した図と年代

No	名称	年代
図7	四国遍礼霊場記	寛文10年～元禄2年(1670～1689)
図8	四国遍礼名所図会	明和元年～享和元年(1764～1801)
図9	国分寺境内図	江戸末期(1830～1867)
図10	高知縣土佐國長岡郡国分寺境内絵図面	明治10年(1877)
図11	国分寺境内図	大正10年(1921)
図12	現在	

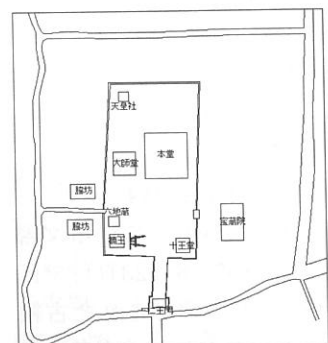


図7. 四国遍礼霊場記



図8. 四国遍礼名所図会



図9. 国分寺境内図



図10. 高知縣土佐國長岡郡国分寺境内

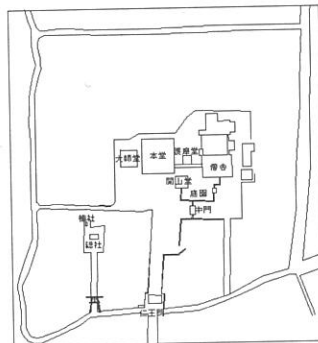


図11. 国分寺境内図



図12. 現在

(1)寛文10年～元禄2年→明和元年～享和元年

本坊部分も境内地となり規模が広がった。仁王門西側の楠社があった場所に総社が建立され、本坊付近に護摩堂が建てられた。

(2)明和元年～享和元年→江戸末期(1830～1867)

境内付近にあった坊が境内へ取り入れた。本堂東側に開山堂が建立された。

(3)江戸末期(1830～1867)→明治10年

廃仏毀釈により坊が廃絶した。その他主要な建物に変化は見られない。

(4)明治10年→大正5年

境内地にあった総社が現在の場所へ移築され、独立した。天皇社・十王堂・六地藏・弁財天など姿を消した。

(5)大正5年→現在

開山堂が総社側に移築(大正期)されたほか、鐘樓の建立、庫裡・書院などの増改築が行われた。

7. 建物変遷について

古図の時代特定を行ったことで、仁王門と大師堂は改築が行われていたことが明らかになった。

7.1 仁王門について

『高知県長岡郡国府村誌』に「明暦元年(1655)山内忠義が楼門を建立し、鐘樓を廃して鐘を楼上にかけた」とあり、『四国遍礼霊場記』(楼門形式で二層目に鐘が描かれている)からも確かであったと言える。しかし、『四国遍礼名所図会』以降～明治37年(1904:図6)までの絵図は「二重門」で、楼門の形式とは矛盾する。

そこで、改修歴を調べてみると、再建が明暦元年以降棟札によって確認できるのは、「天保8年(1837)」のみで

あった。しかし、仁王像の頭部に仁王像が改修された時期「天明6年(1786)、天保8年(1837)、慶應2年(1867)、昭和3年(1928)」が記入されていて、同時期に仁王門の改修も行われた可能性があると考えられている。そこで、同時期に改修が行われたと考え、享和元年(1801)以前では「慶應2年」に改修されており、この時、「楼門→二重門」に変更されたのではないかと考えられる。

そして、現在建つ楼門への改修は享和元年以降明治37年(1904)まで二重門であることから、明治37年(1904)以降に改修されたと考えられ、仁王像に書かれた改修歴から、おそらく昭和3年(1928)に改修が行われたと言える。

表3. 仁王門一覽票

『四国遍礼霊場記』 1670年～1689年	『四国遍礼名所図会』 1764年～1801年	【図4】
【図5】 1877年	【図6】 1884年～1904年	【現在】

7.2 大師堂について

大師堂は寛永11年(1634)に創建され、文化元年の棟札と奉行所とのやり取りの古文書が発見されたことから、文化年間に再建されたことが明らかとなり、現建築は文化元年のものと考えられていた。

しかし、今回古図の時代特定を行ったことで、明治17年(1884)にも改築が行われていたことが明らかとなった。文化元年の再建は、古文書にあるように「三間四面・柿葺・向拝の取り付け・石積基壇を強固なものに」であった。表4の第5図がその時の形式である。この図から、大きさは判断できないが、柿葺で向拝が取り付けられていて、石積基壇であることは確認できる。

次に、第6図が明治17年に改築された後の形式である。この時の改修は「入母屋造・千鳥破風・向拝・軒唐破風・柿葺・スロープ」であり、同じく規模は特定できないが、おそらく三間四面に向拝が取り付けられたものであると考えられる。

第5図と第6図の大きな違いは屋根の形式で、第5図が方形造なのに対し、第6図は入母屋造となっている。絵図での比較で細部意匠の変化を読み取ることができないため、全体的に改築を行ったのか、部分改築なのか明らかにできないが、改修されたことは確かである。

次に図6から現在への変更であるが、千鳥破風は昭和35年(1960)に柿葺から銅板葺への改修が行われた時に取除かれたとの記述があった。しかし、古写真の収集分

析により、昭和11年(1936)に刊行された『四国霊場大観』ではすでに千鳥破風は取り除かれており、それ以前に改修された可能性があると考えられる。

表4. 大師堂一覽票

【第5図】 1877年	【第6図】 1884年～1904年	【現在】
三間四面・柿葺 宝形造 向拝 石積基壇	三間四面・柿葺 入母屋造 向拝・千鳥破風・軒唐破風 石積基壇・スロープ	三間四面・銅板葺 入母屋造 向拝・軒唐破風 石積基壇・階段

8. まとめ

図1(江戸末期)を参考に絵図の時代特定を行った結果、図1～図4には坊が存在することから江戸末期(1830～1867)頃のもので、これらの図はいずれも寺領が削減された時に描かれたものであると考えられる。描かれた順としては図2・図3・図1・図4と思われる。また、図5については払下げの文書があることから明治10年のものであることが分かり、図6は総社の向きと大師堂の形式に変遷が見られることから図5以後でその時期は明治17年～明治37年であると言える。

境内については、長宗我部再興後、山内氏時代に諸堂の建て替えが次々に行われ、境内整備がなされた。その後、廃仏毀釈によって坊の廃絶や総社の移築、弁財天の移転など大きく変化したことが認められたほか、大正期に開山堂の移築、そして昭和に入ってから鐘樓の建立、庫裡等の増改築などが行われ現在に至っていることが分かった。

最後に建物について、仁王門は楼門で再建されて以降現在までその形式を伝えてきたものと考えられていたが、江戸後期～昭和の初めにかけては二重門であったことが確認された。また、大師堂は文化元年と明治17年に改築され、千鳥破風の取り除きは1936年以前であることが明らかになった。

参考文献

- ・「[特別展]土佐国分寺 四国八十八ヶ所霊場①」2005
- ・「四国遍礼霊場記」 寂本著 1689
- ・「土佐国分寺 庫裡改修に伴う発掘調査概報」 岡本健児/他
- ・「土佐国分寺跡一第4次発掘調査報告書一」2009
- ・「南国史談1号」 南国史談会 1986
- ・「高知縣長岡郡國府村誌」 國府村史編纂委員会 1961
- ・「高知県の近世社寺建築」 高知県教育委員会 1981
- ・「南国市史 上巻(1979)・下巻(1982)」
- ・「四国霊場名勝記」明治42年
- ・「南路志」